



皐月

部誌『臯月』多媒体への再録にあたって

詩に一番近いところ 翁長徹

私が巻末の「俳句という戦い」を書終えたのが二〇一八年二月二十四日のことで、第二十一回俳句甲子園全国大会を終えて間もない現時点(二〇一八年八月二十二日)から振り返ると、そろそろ半年が経つことになります。今年再び全国の舞台へ向かうことが叶い、二年ぶりの出場という意味では雪辱戦とも呼べる大会でした。優勝までは至らなかったものの、地方予選の時点から最優秀句賞を三年連続で受賞、全国大会では個人賞や団体奨励賞を再び獲得した事は、恒常的な彼らの句の力量を示しています。とりわけ、第二十一回俳句甲子園全国大会個人最優秀賞を獲得したことは、言うに及びませんが、ここ二年半の目覚ましい活動の中でも、類い稀な躍進を象徴している事でしょう。

第二十一回俳句甲子園全国大会 個人最優秀賞

滴りや方舟に似てあなたの手 桃原 康平 (興南高等学校)

この句が受賞した意味を考えるのに、三年間という戦いの視点や、「沖繩という地方が全国の読みに匹敵した」という視点を取ってしまっは句が語りに隠れてしまうし、かと思えば、賞を受賞(二〇一八年八月一九日)して間もない今(二〇一八年八月二二日)から読みを始めるのは、半年間の彼らの躍進を句に込めて語るにはあまりに短く、あまりに切迫した時の量になってしまいます。長かったようで、短かったような。今までの活動を読み返しながら、この句に対面した時、そう感覚せざるを得ない現状にいます。その「語りづらさ」は、時に「生きづらさ」へと繋がることでしょう。「読みや語りに対して、どこかで禁欲的にならなくてはいけない」というこ

と。今回の大会である審査員が評したことです。この句にはより一層そういった構えが必要であるように思えます。どこかで禁欲的にならざるを得ない句がある。その句を、どれだけ掬うことが出来るのか。

そこまで考えた時、この書下ろしの中で、「彼ら」という言葉の中身そのものが交替していることも、さらに話さなければいけません。「俳句という戦い」において登場した「彼ら」は、この書下ろしが発表された時点で、既に興南高校を去った、あるいはもうすぐ去る予定の人物達になります。ですから、この書下ろしに登場する「彼ら」は、少なくとも二つの様相を持つことになります。既に高校を卒業した生徒達と、そこから襷を受け継いだ安里恒作氏を含めた（「俳句という戦い」における）彼ら」と、その安里恒作氏を含めて高校に実存する（「書下ろしにおける）新しい彼ら」です。個人最優秀賞を受賞した桃原康平氏は、「俳句という戦い」を執筆していた時点では、出会うことすら予想しなかった新しい人物ですから、「新しい彼ら」ということになります。「新しい彼ら」を交えつつ、「彼ら」と同じように全国での優勝を目指す。そのような活動の様相が、「彼ら」という言葉から見えることになりそうです。彼らのおよそ二年分の年月の活動（二〇一六年四月〜二〇一八年二月）が、「俳句という戦い」から、この書下ろしにいたる半年によって語られようとしているのです。

二年半の戦いや活動において、はじめの目的であり続けている全国優勝は未だ手元にありません。しかし、その「全国優勝」という目的を追い越すかのように、彼らは個人最優秀賞を授かることになりました。そういえば、全国出場の切符さえつかめなかった去年の個人最優秀賞は、このような句が選ばれています。

第二十回俳句甲子園全国大会 個人最優秀賞

旅 いつも雲に抜かれて大花野 岩田 奎（開成高等学校）

もし、興南高校の彼らの（優勝へとむけた活動）が「旅」だとするのなら、それを抜くような「雲」として（個人最優秀賞）が現れてきたのではないか。そういう風に思っています。あるいは、ともすれば優勝や賞、旅

や雲ばかりがクローズアップされがちだが、ふと足元を見れば大花野がある。大花野に立ち、歩み始める彼らがいる。どんな賞や名誉も、どんな詩も、滴りや雲や方舟のように、どこからともなく彼ら（あるいは私達）へ運ばれてくる、むしろそのような全くわからない運ばれ方をするからこそ、意味が始まってくる。そのような感覚が、今、彼らには与えられつつあるのではないだろうか。

興南高等学校の「賞に抜かれた」感覚は、優勝などの賞よりもはるかに大きな意味を持ちつつあります。詩の言葉は、常に遅れて届くものですが、「臯月」の中に居る彼らは、俳句という作品の中にある言葉もさることながら、「賞に抜かれた」という行為そのものにおいて、二〇一八年八月現在、大変詩に近い存在であるように思えます。ともあれ、俳句甲子園を経由して、様々な詩の在処を、今後も彼らは（無論私達も）、探求していかなくてはなりません。その発端として、「臯月」はますます、あらゆる読みに応える一冊になることでしょう。

（二〇一八年八月二二日 午後七時過、愛媛から戻り一夜明けた沖繩にて）

○メンバー紹介

安里恒作

紛れもなく興南のエースでキャプテンでリーダーで主将でボスで一番の実力者。特に大景を詠ませたら興南一の新高校三年生。ボーイスカウトにも所属しており、サバイバルもばっちり、災害時に最も頼れる俳句高校生である。普段は何も考えてなさそうな言動で我々のギャップ萌えをさそう。「俳句の時は違う俺がクルッて出てくるんすよぉー！」

(紹介者:山田祥雲)

山田祥雲

なんでもオールマイティーにこなす事ができる山田先輩。俳句を始めてからメキメキと力をつけてとても頼れる先輩の一人。始めて出場した全国大会ではディベートの中心となって他校の句に的確な詠みを展開してくれた。たまには安里と一緒にキャッチボールなどもお茶目な一面も持ち合わせている。

(安里恒作)

棚原きらら

言わずとしたセキエツガール(関悦史ガール)。

マイクを使うのが上手で、句を披講したりディベートをしたりする際の安定感は一ピカイチ。彼女が句のディテールをしっかりと確認してくれたおかげで助けられた場面も数多くあるが、基本的には大雑把な性格をしている。近現代文学が好き。

(崎浜由依)

崎浜由依

部内でのあだ名は幼女だが、愛光さんからは鑑賞の神と言われるほど句の鑑賞に定評がある。興南のデイペー
トの攻めは彼女から始まり彼女の鑑賞があるからこそ私たちは相手の句についてしっかりと向き合う事が出来
る。部内では幼女という立ち位置だが基本的に口から出るのは、毒か平安時代か藤原行成である。

(鶴岡夏鈴)

鶴岡夏鈴

「エゴサの鶴岡」という渾名からわかる通り、鶴岡は情報収集能力に長けている。機械音痴が集まる興南俳句
部で唯一電子機器を使いこなせる人物だ。この部誌も彼女がいなければ発行できなかったろう。様々な面から
部を支える鶴岡だが、泣きながら句を作っていた事もある。その象徴的話として「秋の空事件」があるが、詳細
はまた今度。

(棚原きらら)

話せばわかりさう

山田祥雲

春昼や床屋の甘く首を絞め

胸板の一枚ありて春の風

おたがひの名をも知らねど芝桜

かはほりの顔の話せばわかりさう

かふことをあきらめられたみづくらげ

めいつぱい夏野を轆いて帰りけり

寝坊して秋風鈴の台所

夜食来る食はれるための努力して

芸術を探すまなこの芋煮会

神きつと楳円が嫌ひ寒卵

中心にポテトサラダの聖夜かな

帰らうと思つて帰る冬の海

仰ぐ

安里恒作

夜光虫もろともに海うち寄する

街道を小鳥さまよふ溽暑かな

籠枕深山の碧き冷えをもち

風吹いて秋の風鈴仰ぎけり

食洗機泡を吹きたる台風圏

眠りたる人の唇秋彼岸

落果いま夜長の沖へ流れだす

連山の夕影淡き湯冷めかな

啓蟄やたくさんの手が吊り革に

陽炎の淵に無秩序なる献花

さなぎが揺れる

棚原きらら

小脳を挟んで春のピンセット

春の海解剖後のゴミ袋

水を診る人のしづもり夏に入る

牛の食む跡は夏野に覆はれて

夏蝶の胎動に揺る蛹かな

エンドウを剥いてあげたき人のいて

銀漢やレアメタル回収ボックス

白息や父は愛煙家のままで

風邪の日の水が教へる喉仏

初富士も画面の中に収まりぬ

微睡む

崎浜由依

たんぽぽの踏まれし跡や雲流る

乙女座の棚田に溶けて水温む

蝌蚪遊ぶ水の昏さや予鈴鳴る

佐理の草書のいろにかぎろへり

切れ目なき雲の寿命やダリヤ咲く

十六夜やジャングルジムの低く見え

街角の公衆電話星流る

小指にも入らぬ指輪月冴ゆる

冬籠砂糖の飽和した夜空

旧姓の印鑑仕舞ふ春隣

たおやか

鶴岡夏鈴

春の園昨日の雨を溢したる

三枚のシーツに交じる春夕焼

空箱の中の模様や春惜しむ

水を飲む喉美しく夏に入る

林檎きるきる平皿へばっさりと

水天のパレット滑る小鳥かな

色鳥や洗濯物の空ができ

空がまだ交じわらぬ時鷹渡る

笹鳴や日陰になれぬ庭の隅

水槽の滑る砂粒日脚伸ぶ

第十九回俳句甲子園

○地方大会

「水温む」

乙女座の棚田に溶けて水温む

崎浜由依

水温む野に寝転んで俳句詠む

山田祥雲

水温む母に私のいた時間

安里恒作

こんもりと木と稚魚のいて水温む

棚原きらら

水温む背中で語る関白記

鶴岡夏鈴

「子猫」

猫の子の瞳大きく雨上がり

崎浜由依

教科書を叩く子猫や机の灯

山田祥雲

猫の子の新しき日の獣道

安里恒作

猫の子や自転車の輪に寄り添へる

棚原きらら

これからを子猫のそばで語らへり

鶴岡夏鈴

「苺」

くさむらに吞まれぬ苺標とす

崎浜由依

菌のあたり苺の露のほとばしる

山田祥雲

苺食ふ恋爛漫の日照雨かな

安里恒作

愛ほしき命でつつお苺かな

棚原きらら

朝の家玉座につきて苺食う

鶴岡夏鈴

○全国大会予選

「短夜」

明易し雫の音の祖母の家

棚原きらら

明易の枕の浅き窪みかな

安里恒作

短夜に翳すおもちやの指輪かな

崎浜由依

合鍵を返す書き置き短き夜

鶴岡夏鈴

便箋に明易の香の水曜日

山田祥雲

「浴衣」

藍浴衣箆笥の匂ひ染みつきし

棚原きらら

眠たさのただそれだけの浴衣かな

安里恒作

水風船ついては浴衣翻る

崎浜由依

藍浴衣鏡の前で舞つてをり

鶴岡夏鈴

喧騒の海を浴衣の漂へり

山田祥雲

「蜥蜴」

青蜥蜴ランプの影に生まれるか

棚原きらら

子の剥きし林檎いびつに皮残る

崎浜由依

石灼けて青き蜥蜴の薄くをり

安里恒作

母が切る林檎はいつも皮がない

鶴岡夏鈴

尾の切れし蜥蜴の泳ぐ籠の中

崎浜由依

「利」

山田祥雲

葉野菜の腐食のやうな蜥蜴かな

鶴岡夏鈴

利き耳を寄せたる祖母や秋祭

棚原きらら

青蜥蜴轆かれて長く冷たい尾

山田祥雲

秋草や利き手をつつむ大落暉

安里恒作

○全国大会決勝トーナメント

「天の川」

鶴岡夏鈴

銀漢に祖母の草履を借りてをり

棚原きらら

鈴の緒や砂利休まらぬ初詣

山田祥雲

波音や釣れぬバケツの天の川

安里恒作

「尾」

棚原きらら

手に触るる風に雫や天の川

崎浜由依

明易や尾鱗に水の動きあり

棚原きらら

一切は足音と風天の川

鶴岡夏鈴

深秋の音消えてゆく尾羽かな

安里恒作

火遊びの出来ぬ公園天の川

山田祥雲

文庫本狗尾草の触れてきぬ

崎浜由依

「林檎」

鶴岡夏鈴

立派なる林檎の皮のとぐるかな

棚原きらら

色鳥のよく動く尾やバスを待つ

山田祥雲

林檎割る音一瞬の青さかな

安里恒作

第二十回俳句甲子園

○地方予選

「陽炎」

佐理の草書のいろにかぎろへり

陽炎や漆の箸が黄身くづす

陽炎や書いていながら忘れたる

陽炎の淵に無秩序なる献花

葉脈に沿ひかげるふの立ち上がる

「しゃぼん玉」

日が差して画用紙に石鹼玉の痕

白昼のモデルハウスを石鹼玉

石鹼玉姉の日傘を濡らしたる

シャボン玉割れて背景だけがある

公園の暗きへしゃぼん玉流る

「立夏」

押花の水吸ふページ夏に入る

水を診る人のしづもり夏に入る
棚原きらら

信号の後ろはしづか夏に入る
山田祥雲

はるばると海触れに来る立夏かな
安里恒作

水を飲む喉美しく夏に入る
鶴岡夏鈴

崎浜由依

棚原きらら

山田祥雲

安里恒作

鶴岡夏鈴

安里恒作

鶴岡夏鈴

崎浜由依

棚原きらら

山田祥雲

崎浜由依

俳句鑑賞

○山田祥雲選

鴨肉は軽く切られりテーブルマナー

棚原きらら

この句は去年の秋頃に行った、マナー講習会後の首里城句会で僕が特選にいただいた句。この鴨肉は季語だと見なすことは出来ないだろうから、無季だと考えていた。しかし「軽く」が効いていることや「切られり」の切れのあとの「テーブルマナー」で落ちで、鴨肉が軽く切られることが、当然のことであるかのように読めたこと、あるいは当時が秋だったということなど原因はいくつか考えられるが僕は秋を感じた。無季として読むべきなのに秋を感じてしまうのは読み方としてどうなのかとも思ったし、なんならあまり良くないと考えているけれど、なにせよ僕はこの句が好きだし、大会句を除けば僕の中で棚原の句の中で一番印象に残っている句である。

一切は足音と風天の川

鶴岡夏鈴

この句は興南俳句部(本当は部ですらない)が発足して初めて全国規模での賞を受賞した句で、多分興南高校についての印象を俳句甲子園出場校の方々に聞いたら九割くらいは「一切はくの印象しかありません」って言われるかもしれない。それくらい強い句、なんだけれど高校二年生当時の僕たちはこの句の魅力があんまりわかっていなかった。もちろんディベートのためにこの句の理解を深めはした、でもまさか絶賛されるとは、賞をとるとは、思っていなかった。今では当時の講評で審査員の先生のおっしゃったこの句に対する鑑賞も理解でき

る。だけどやっぱり自分たちで気づけるようになっていたかったなという思いもあった。句の魅力を見逃さないために多くの句を読むことを意識するようになったきっかけをくれた句。

佐理の草書のいろにかぎろへり

崎浜由依

これは去年の俳句甲子園地方大会「陽炎」の大將句。崎浜の句で一句選べって言ったらこれしかないかなと思う。他のメンバ―も選ぶんじゃないか。というのも、崎浜由依は平安時代オタクなのだ。藤原佐理なんて日本史に達筆だよくらいで出てきたイメージしかないのだが、この句を通して佐理のこと、なにより崎浜の平安時代への愛を知ることができた。僕も好きなもので詠んでみたことはあるけれど大抵つまらない句になった。そういった意味でこの句がうらやましいと思うし、崎浜ってすごいなと思う。ディベートもかっこよかった。

夜光虫もろともに海打ち寄する

安里恒作

第二十四回都留市ふれあい俳句大会で、正木ゆう子先生准賞と、山梨県教育長賞を受賞した句。僕たちが文化祭の催しで俳句ディベートをしたときに用いた句でもある。景自体は一読してすぐに想像できる上に、「もろとも」の四連続。音や打ち寄せるのを波でなく海としたことで雄大な景がより際立って見えるような工夫もされていて、俳句の奥深さを伝えるのにはびったりだと思った。この予想が当たって文化祭の俳句ディベートはとても盛り上がった(と思う)。部員は増えなかったけど。

○棚原きらら選

連山の夕影淡き湯冷めかな

安里恒作

遠くの連山が夕日を背に淡い暗さになっている、それをぼんやり見つけていると湯冷めしてしまった。そんな雄大な景色が広がっていたら湯冷めもしますよね。連山という何だか強そうな、厳めしい景色が夕日のせいで淡いシルエットのようになっているとこの句の景の美しさに惹かれます。そこから下五の湯冷めかな、でぱっと自身に引き戻されるような。カメラワークが素敵です。

めいつぱい夏野を轆いて帰りけり

山田祥雲

トラクターなどの大型農機具や自転車など、とにかくタイヤのついたものに乗る、果ても見えないような夏野の真ん中を力強く帰っていく。めいつぱい、から感じられるようにエネルギーに満ち溢れた夏野らしい夏野の句だと感じました。轆かれた草もまたゆっくりと立ち上がり青々と生い茂るのだろうか、と。この句の景を想像するだけで、私はすごく元氣になれます。

林檎きるきる平皿へばっさり

鶴岡夏鈴

林檎を切ってお皿に盛るといふ平凡なごく当たり前の景を描く中、きるきると反復し、ばっさりなど聞き慣れない言葉で修飾しながらもイメージが容易に湧くことで、なんだか少し不思議な感覚になる句で、魅力的だと感じました。きっとこの平皿はどこにでもあるようなシンプルな皿なのだと思います。飾らぬ平皿こそが奇抜な言葉と相まってこの句の不思議な感覚に一役買っているのでしょうか。

乙女座の棚田に溶けて水温む

崎浜由依

段々に広がる棚田の水面に乙女座の光が淡く滲んでいる、きらきらした句だなと感じました。乙女座の柔らかな字面と響き、水の張った夜の棚田の美しさ、そしてその水は星の光を溶かして温かさ。春とは言え、きつと夜の水は冷たい。それでも乙女座の光が溶け込む水は温かいのだと思います。細やかで繊細な感性で描かれたこの景が好きです。

○崎浜由依選

身に沁むや妊婦の心臓はふたつ

棚原きらら

ひんやりとした温度と、妊婦さん、それから彼女の宿すもう一つの生命に焦点を絞った句。お腹の大きく出た妊婦さんというよりも、今しがた妊娠がわかった妊婦さんといった印象を受ける。母親になる実感はまだなくとも、自然と我が子に意識の向かう僅かな意識の変化の表現が繊細で優しい。実際には音に温度はないけれど、この二つの鼓動からは不思議と静かな温かさを感じる。

飛行機雲端から春の雲となれり

山田祥雲

穏やかな春の青空に一筋の飛行機雲が走る。その雲は端から解けて輪郭を失い、次第に春の雲へと変わっていく。そんな平穏な日の何気ない空の風景だ。心なしか時間の流れる速ささえも緩やかに感じる。しかしそれは、時間はけして停滞しないのだと柔らかく諭すような切なさも内包しているように思う。

水を出て初めての息春の闇

鶴岡夏鈴

しばらく潜水していた人が漸く水面から顔を出し、大きく息を吸う。水の中という穏やかで、いつもより少しだけ死に近い空間から帰ってきた実感。普段より僅かに輝きを増す生命。春の闇は恐ろしさだけではなく、それと表裏一体の生命力も秘めている。そんな神秘的で幻想的な世界が日常的な光景で表現されているように思う。

手袋をつけて心を探しをり

安里恒作

心というのは抽象的だ。だからこの句は手袋以外が全て曖昧な景として浮かんでくる。しかし懸命に手袋で隔てられた感覚の中、手探りで心を探す景が自然と想起されるのだからこの句は面白い。心とはオズの魔法使いに登場するブリキ男が欲したものなのか、それとも作者の大切なものを心と称しているのか。それによって景は多少変わるけれど、本質的には変わらない句であると思う。

○鶴岡夏鈴選

便箋に明易の香の水曜日

山田祥雲

明易の香ってどうゆうものだろう。私は、少し冷たさのある澄んで凜とした香りだと思う。便箋に明易の香を感じただただそれだけ、日常にありそうなことなのに下五の水曜日が少し特別感を与えてくれるような気が

する。明易、香り、水曜日が合わさるからこそこの句は、読んでいくごとに面白味が再確認される句だと思
う。

夜光虫もろともに海打ち寄する

安里恒作

この句は、凄く想像しやすく、生命の魅力を感じさせてくれる句だと思う。夜光虫という幻想的な生き物が波のように海に打ち寄せている美しい景を中七のもろともがより魅力的に伝え、読む人を引き込んでいるように感じる。パッとみた綺麗さ雄大さ以外にもこの句には様々な広がりを見せてくれ、ただ単純に心から引かれるものがある句だと私は思う。

乙女座の棚田に溶けて水温む

崎浜由依

この句は、乙女座と棚田そして水温む、綺麗なものが集まって出来た句だと思う。上五中七の煌くような綺麗さ、そして下五のかすかな温みはこの句を全体的に温かく包んでいるような句だと思いました。高二の五月にこの句に出会い俳句というものの可能性に気付かされ、俳句の面白さを教えてくれた句です。

風邪の日の水が教へる喉仏

棚原きらら

風邪の時だからこそ液体が喉に流れていく感じが生々しく感じるのには誰しもある経験だからこそ、凄く共感性のある句だと思う。風邪の日だからこそわかる喉仏の形・太さ・感触・温度、それらを普段何気なく飲んでいる水が教えてくれる感じさせているところがこの句の魅力である。

○安里恒作選

めいっばい夏野を轢いて帰りけり

山田祥雲

いかにも夏野だなど思った句だった。夏野は緑深く、草いきれの立つように広がっているのだろう。そこを車か自分の脚などで轢いて行った景が力強く見える。その後にはべしやんこになってしまった夏野たちが広がっている。大きな景だがしっかりと夏野の強みが出ている。この句がいつの句会だったかは覚えていないが印象的な句だった。他にも悩む句は沢山あったがこの句が一番僕の好みだった。

銀漢やレアメタル回収ボックス

棚原きらら

銀漢とレアメタルの取り合わせがとてもよかった。銀漢と言う大量の星の集まりと希少金属とされるレアメタル、この二つをしっかりと組み合わせてある。最初は対比的な所もあるが両方とも硬質な雰囲気をもっていて近いようで近くない独特な世界観があった。

佐理の草書のいろにかぎろへり

崎浜由依

いかにも崎浜先輩だなんて思ってしまう句。俳句甲子園の地方予選で使った句で句の詠み込みの時もとても印象的だった。この句は何と言っても佐理の魅力の句だと思う。佐理の草書の白黒の濃淡を「かぎろへり」に着地させたのは凄く納得した。この句に会うまで佐理の事はあまり知らなかったが、この句を通して知ることができた。とても良い句で、沢山の思い出のある句でもある。

水を飲む喉美しく夏に入る

鶴岡夏鈴

水を飲む喉と夏に入っていく感覚が合わさっていて上手かった。水は毎日の飲んでいるがその行為が美しさをもって夏へと向かって行く。水を飲む喉の姿と夏に入ること両方に美しさが掛かってとても良い匂だと思っただ。俳句甲子園の地方予選「立夏」の大将戦に相応しいとても良い匂。

豊かな可能性

安里琉太

彼らがもう卒業するのかと思うと、すこし驚いて、そのあとじんわりと自分の齡が心配になってくる。私は今年で二十四歳になるが、はやくもこうした年寄りじみた感慨を抱かざるを得ないのは、これほど豊かな可能性を持った書き手がひしひしと後ろから迫ってくるという危機感と、それで尚、走り続けなければならないとどここ心地よい疲労感によるものだと思う。興南に俳句部が創設して、ものの四ヶ月のうちに俳句甲子園全国大会のベスト六に食い込み、それだけでは飽き足らず、岸本尚毅氏の審査員賞を獲得。その一年後には、正木ゆう子氏や長谷川權氏など第一線で活躍する作家が選をする都留市ふれあい俳句大賞において、最優秀賞、優秀賞、佳作を乱獲するに至った。確かな作家が選んだという厳然たる実績が、言葉を尽くさずとも彼らの力量を示している。ただ、その末恐ろしい実績も、やはり一つの結果でしかなく、この部誌に集められた句のそれぞれが可能性へ開かれていることこそ、私を感じているプレッシャーの核であるように思われる。そんなことを考えながら、彼らひとりひとりの句を読み、その可能性について書いていくことをこれから試みるのである。

薔薇として調へられし薔薇買はず

山田祥雲

第二十四回都留市ふれあい俳句大会で大賞を受賞した句だ。多岐にわたる品種に広がった薔薇は、争って女性の名前がつけられ、もともと存在しなかった色を生成され、過分なほど人間の美や欲望によって手掛けられ

てきた。この句は、そうした薔薇をめぐる美や欲望を背景とし、さらに店頭でアレンジメントされる薔薇を詠んでいるのだらう。達成されることなきアイデアのような究極に向かって苛烈な欲望を注がれる薔薇を拒む。拒むことによって、強く美学が表出しているのである。この句を読んで、私は高柳克弘氏の「桜貝たくさん落ちてみて要らず」を彷彿とした。そして、次に長谷川權氏の「春の水とは濡れているみづのこと」を彷彿とした。その何れにも共通する点は、美学化された概念を詠む対象に据えることで、硬質な诗情の側面が覗いていることだろう。同じく都留市ふれあい俳句大会に投句された「これよりは花野に落ちし肉である」、「広がって聖歌を歌ふ避暑なりけり」にも、そうした傾向を見る事が出来よう。ただ、その一方で、彼の俳味ある詠みぶりにも注目したい。

芸術を探すまなこの芋煮会

水温む野に寝転んで俳句詠む

一句目は、「芸術」という概念的な言葉をそのまま句に入れることで言葉を浮かせている。また、季語の斡旋もわざとらしくミスマッチにして違和感を作っている。二句目も、「俳句」という概念的な言葉を用いて、そこから寝ころんでいる人のキャラクターの面白さへ興味を傾けさせる。

小鳥来る語尾がござるのインド人

こっちは、キャラクターの面白さにどっぷりつかっている句だろうか。もちろん、こうした句の面白さは、表面的で「面白過ぎる」という評価を受けるかもしれない。

中心にポテトサラダの聖夜かな

この句も、幸福な「聖夜」とチープな「ポテトサラダ」のミスマッチが基本的な面白みの原理になっている。小野あらた氏の「コロッケの中の冷たきクリスマス」は、そうしたミスマッチから寂しさを取り出してきたが、この句の場合は面白さへと向かっている。こんもりと盛られたポテトサラダには、細切れの人参と胡瓜が入っていて、ささやかなクリスマスカラーになっているのかもしれない。「中心に」という上五は、このポテトサラダが置かれた部屋という空間を導く。三橋敏雄の「柔かき海の半球クリスマス」を思えば、こんもりと盛られたポテトサラダが、まさしく「柔らかき半球」に思えないこともない。この句は、前述した面白い句から、もう一步踏み込んで形象を獲得しているように思う。「俳句は二重構造でなければ意味がない」と言ったのは、飯島晴子であったように思うが、まさしくその金言に叶っている句だろう。

かはほりの顔の話せばわかりさう

彼の俳味には、いま文体がついてこようとしているように思う。リグリスティックで硬質な詩情、俳味。その二点で、初期の長谷川權の作風に似ており、そこが選者である氏を打ち抜いたひとつの要因ではないだろうかと考える。数々の例句を引用したが、既に作り上げられた膨大な句に耐え得る俳句を今後も書いていってもらいたいと願っている。

青蜥蜴轆かれて長く冷たい尾

火遊びの出来ぬ公園天の川

信号の後ろはしづか夏に入る

一句目、物を見ていることで、迫ってくる感覚の鋭敏さ。二句目、火遊びが出来ないから天の川が見えてい
る、といった理屈以上の働きをもった季語の斡旋。三句目、ふとした無為の瞬間の透明な詩情。彼の積極的な
特徴からはやや逸れたが、これらの句は、私にとって、かなり良いものに映った。

佐理の草書のいろにかげろへり

崎浜由依

佐理は、小野道風、藤原行成とともに「三蹟」に数えられる藤原佐理を指す。現存の真筆の多くが詫状であ
ることが、どこかふらふらとした人物像として伝えられているが、その緩急の変化に富んだ草書は「佐蹟」と
呼ばれ、現在に至るまで和様の規範として好まれている。

この句は、つまるところ、見立ての句である。そして、見立ての句は、詩的飛躍をわりと簡単に創出できる
ため、初心者にも扱いやすくコストパフォーマンスが良い作り方だ。すこしやってみよう。例えば、冬になっ
て葉も落ち切った木がある。枯れて寒そうで、すこし立ち寄ってみると樹皮はしわが目立ち、瘤は赤みを帯び
ている。そんなことに気付いてくると、ふと老人の手のようだ思い立つ。そう考えるとだんだん木が天を掴も
うとしているように見えてくる。「老いすさぶ五指のごとくに冬木立」がプロトタイプ。「老木は冬の夕日を掴
むかな」だと、季語を空に配した分、句が広い。ちょっとカメラワークを引いて「曇天へ向け寒林はいくつも
の手」とすれば、数の分だけ威力は出たし、空間として不気味だし、象徴的になる。ちょっと無頼派っぽくや
ると「さびしき木こがらしの日を掴まむと」とかだるうか。「冬木が掴む誰かの臨終のゆふやけ」とかなら拘っ
た長律っぽくなる。このような「そう言ってみた」、「言い換えてみた」といった作り方は、形や色といった共

通する一つの性質を根柢に正反対なものや意外性のあるものに飛躍する。そのため「言い換えてみた」といった地点で満足すれば、実のない蛻の殻みたいな句になりがちである。

ただ、「佐理」の句の場合は、佐蹟の流麗な線や墨の色彩が、次第に躍動し艶みを帯びながら、実をもって迫ってくるような迫力を獲得しており「言い換えてみた」という地点に陥ってはいない。また「佐理の草書」というだけあって、字面が非常に効果的にしつらえてある。字は読む上で、内容より先に目に飛び込んでくるのであって、内容の印象に関わることは言うまでもない。「草」と「陽炎」と言えば、臼田亜浪に「陽炎の草に移りしタバかな」があつて、この句においても「草」の一字は、内容とは違ふところで「陽炎」の印象に一役買っているだろう。また、「いろはにほへと」の仮名文字に倣つて、「いろは」以降連なるひらがなは、陽炎の実態のない様子を文字の上で写實的に表しているともいえよう。この句自体を佐理が書いたらどのようなものになるだろうという愉快な想像の余地もある。この句に見られるように、由依さんの根柢には、古典の豊穡な世界への憧憬が横たわっている。もちろん、彼女の句の興味がそればかりというわけではない。

たんぼほの踏まれし跡や雲流る

蝌蚪遊ぶ水の昏さや予鈴鳴る

切れ目なき雲の寿命やダリア咲く

一句目、誰かが既に踏んだたんぼぼがある。雲が流れるというのは、「跡」という過去の一点と対比的に過ぎ去っていくのであり、そこにほんのりと気持ちがある。二句目、理科室などだろうか。或いは、虫養いの水であるから、あまり上等なところにあるわけでは水たまりだろうか。水の昏さをのぞきこみながら、予鈴を聞いた

ている。仄暗い個の時間を思わされる。三句目、「雲の寿命」というのが詩的な表現だ。「切れ目なき」というのも不思議で、切れ目がある雲は確かに「寿命」を思わせるかも知れないが、全き雲に寿命をみているというのは不思議である。一方、雲よりこちら側にある騒々しい色とかたちのグリアが、一見無関係ではあるけれど、晩夏の白昼の寂しさを思わせるようでもある。何れも、中七を「や」で切って、「名詞」に「動詞」を配して展開を作っており、一つの型を駆使しているいろ試しているように思える。

水を診る人のしづもり夏に入る

棚原きらら

興南のセキエツガールこときららさんの句だ。セキエツガールとはつまり何なのかイマイチわからないのだが、俳人の関悦史氏のこと大好きなガールというところだろう。何はともあれ、好きな作家が居るといっは、自らの句を展開していく上でかなり有利である。

「立夏」の句は、夏に向けての感慨を含むためか、動的な句が多いように思う。その反面、この句は「しづもり」と言っている既に一つの意外なフックが仕込まれているのだが、句の情報としては「水を診る」というのがフックになっている。あたりには透명한フラスコやカラフルなpH試験紙などがあるのだろう。彩りがある。

青蜥蜴ランプの影に生まれるか

灯の近くの闇はどことなくグラデーションがあって、見ていると涼やかに思うことがある。青蜥蜴の色のつめたさや見失いやすさを、その生誕をかりそめに設定することで言い留めることに成功している。

しゃぼん玉割れて背景だけがある

「背景だけがある」というのは複雑だ。「背景」は「前景」がなければならぬわけであるが、その「前景」が消失しなければ「背景だけがある」という把握にはならないのである。やや理知的な把握であるように取られるかもしれないが、それまで一身にひかりを纏っていた石鮫玉がパチンとはじけると、まさに「背景だけがある」といった空虚な感慨だけが残ってしまったと考えると、わりと自然に導き出された言葉なのかも知れないと思う。何れも俳句甲子園で使用した句だが「見えないもの」へ対する積極的な挑戦が見て取れる。

小脳を挟んで春のピンセット

部誌掲載作品の一句目である。「春桃色」という言葉があるが、「春のピンセット」という言葉は、寧ろ脳の色合いから導きだされた「春」の印象に思える。

春の海解剖後のゴミ袋

生物がゴミになる瞬間を切り抜いた句だ。春の海は不思議な斡旋であるが、佐藤文香の「みつちりと合いびき肉や春の海」という句を彷彿したりした。今回の十句のテーマは、「生命」といったところだろうか。安易なアニミズムでもなく、手放しの生命への礼讃でもない、ややグロテスクとでもいうべき「生命」の捉え方が示されている。

初富士も画面の中に収まりぬ

一方此方は、画面にちょこんと収まった富士。「収まりぬ」というところに諧謔がある。とはいえ、よく考えると富士山とは不思議なものだ。日本の象徴として描かれる富士は、それを実際に見たことがない人でもイメージできる。このように考えると、画面の中に収まった富士は、ただの諧謔を抜けて、あらゆる象徴として何

度も反復されるイメージであり、ハイパーリアルと化した実態のないもののように思えてくる。そんなことを考えると、この句もセキエツガールの現代との格闘だと思えてくるのである。

水を診る人のしづもり夏に入る

今一度立ち戻ると「水を診る」は、そうしなければならぬ水の危うさを内包している表現であることに気がかされる。公害にせよ、放射線にせよ、不可視の恐怖と格闘することは生命と現代のもとに大きな問題としてぶら下がっている。

空箱の中の模様や春惜しむ

鶴岡夏鈴

いつか何かに使うだろうと思っただけ空箱を取っておくと、あれよあれよとんでもなく溜まってしまふ。この句の空箱は、中にまで模様のあってなかなか手がかかっている、なかなか高価なものが入っていたのではないかと思う。「春惜しむ」という季語が、そこに過不足なく配されている点、一句に広がりを与えた。

色鳥や洗濯物の空ができ

「色鳥」からは、秋空の晴れやかな心地がさり気なくにじみ出てくる。「空ができ」というところにすこし心地よさが入っているように思える。

笹鳴や日陰になれぬ庭の隅

さり気ない発見の句だ。笹鳴きのかそけさと常の陽だまりが呼応しているようだ。

水槽を滑る砂粒日脚伸ぶ

水槽を覗いていると魚の動きから、ポンプの音やその近くの水の流れに気が移っていくことがある。勢いよく噴き出す水が砂を動かしている様子は「滑る」という言葉によって捉えられており、そこに少しずつ伸びた午後の日が鉛色に差している。S音とB音が頭韻と脚韻を繰り返して用いられ、音が良い。

一切は足音と風天の川

正岡子規は、「動詞」を用いてあれこれ述べ立てる句ではない句、つまり「名詞」によって捉えられた句を良い句として示しているが、この句は主に名詞で構成されている。「足音」も「風」も「天の川」も、留まることではない。そんなスケールの大きい時間の間隔を思わされるのである。その昔、誰かが津川絵理子氏を評して「俳句に愛された人」という褒め方をしていたが、彼女もまさしくそうした一人だと思う。気負いのなさ。句材、述べ方ともに平明でありながら、的確な詩の広がりを得ることに苦勞しない。一句の中心を据えることに秀でているのである。

さて、ここまで卒業生の句を読んできた。彼らには、ぜひ今後も俳句を続けて欲しいと思う。高校生という評価のリミッターを外されるだろうが、それに十分耐え得る萌芽はある。あるいはそのような既存の評価の道のをあえて逸れる力量も持っている。なんにせよ、まだはじまったばかりである。

夜光虫もろともに海うち寄する

安里恒作

夜光虫を述べると共に、海が引いてくる大きな闇の余白まで見せてくれるようである。

連山の夕影淡き湯冷めかな

「連山」と言えば、蛇笏の「芋の露」を思い出すが、やはりなかなか渋い言葉である。頭韻と定型の確かさできっちり仕上がっている。

風吹いて秋の風鈴仰ぎけり

「秋風鈴を」ではなく「秋の風鈴」としたところで、広がりが出たように思う。

食洗器泡を吹きたる台風圏

もちろん、台風圏に入っている最中に食洗器が泡を吹きだしたという句だろうが、食洗器のなかこそ台風圏という感じがしておかしい。泡を吹くという具体的な描写が成功しているように思う。さて、卒業してゆく先輩から襷は彼に渡された。彼はこれからのようなチームを作っていくのだろうか。これからも私は、心地よい疲労感を期待することが出来そうだ。

俳句という戦い

翁長徹

はじめに、私が回想録を書く意味を考えておきたい。そもそも私は、この部誌「臯月」の一員である安里恒作氏を中心とした運動に、(指導という名目ではあるものの) 時たま訪れた放浪者に過ぎない。であるから、私がかれから思いたす事柄は、あくまでも彼らの活動のうちの一つの側面であり、断片的にしか書けないだろう。しかしそれは、私が「臯月」を介して思い出される人々と、究極は無関係であることを強調することでは決してない。この回想録を言葉におこすことで、執筆中の私と距離を置き始めた時、回想録内の「彼ら」が、数年後の「彼ら」に読まれた時、回想録を読む「私たち」と言葉に時差が生じて、思い出がどこか遠くで滞留してしまう恐れが、私にはある。彼らの活動をただ鮮明に、誰もが思い出せるためには。そのためには、この回想録が断片のように存在することはかえって好都合ではないのか。俳句のように、思い出が読者へと縫合される余白を常に残しておきたい。縫合は、時として思い出との距離を取り戻し、その時の私を取り戻す手助けになれる可能性があるだろうから。この回想録を、二つの断片として書くことを企てる。彼らの活動の一部分と、私を通して思い出される彼らの過去として、だ。そうして書かれる回想録に、筆者である私を含めたあらゆる他者を、思い出へとその都度繋ぎ直す願いを託す。さて、文頭でこれから思い出す多くの人々の中心として安里恒作を選んだのは、彼を起点としてここ二年間の活動の回想を始めたからだ。

水温お母にわたしのいた時間

安里恒作

安里恒作氏から便りがあったのは、二〇一六年の早春の頃だっただろうか。俳句甲子園への出場を考えており、ひいては指導を仰ぎたい、との内容だった。そうすると、彼らの活動のはじまりには、俳句甲子園の存在があった。そのために彼らは俳句を始め、当面の作句の目的には、いつも俳句甲子園があった。であるから、その口火を切った安里恒作氏は、やはり回想録の中心に適う名だと思った。そして、彼がその年の第一九回俳句甲子園沖繩地区大会で受賞した「水温む…」の一句からは、句で「わたし」を詠むことへ挑む苦しさど、「見えなかつたわたし」に出会えた喜びが、ありありと思ひ起こされる。それは、俳句というよりも、言葉をもう一度詩として使うことで、新たに世界を発見する楽しさだろう。発足して間もないながらも、あのとさから既に、彼らは詩を作る喜びを知っていた。

一切は足音と風天の川

鶴岡夏鈴

あるいは、「一切は…」の句の時のように、詩を作るということは、読むことを想像しながらなされる故に、苦しみを伴ねばならない事も、彼らはその年の全国大会で知る事となる。初出場でありながらも地区大会で優勝し、全国大会へ沖繩代表として出場することの責任を、私は彼らに少なからず自覚してほしかった事を告げねばならない。その責任は、単に代表としてではない。彼らが詩を作ること、「詩が彼らを作る」ことを、私は知っていたからだ。詩は、その言葉以上に何かを語り、読ませようとする。彼らの俳句が全国規模で読まれるという事は、それまで以上に俳句が読まれ、彼らが詩によって評価され、評価に対する責任を伴わせる恐れを、私に予感させていた。故に、地区大会の時よりも、俳句の指導には力を入れた。当たり前のことではあるが、俳句の提出締め切り前には夜毎連絡を取り、一つの題に対して彼らが考えを途切れさす事など無かつた

だろう。とりわけ、彼らが思い描いている景がどこまで言葉にできているのかを、彼らと席を共にして読みあった。その眼前に、もちろん言葉があったにはあった。しかし、言葉ならざる部分こそ、彼らの俳句を作ることを、私は常に考えていた。その時、私は作者ではなく、「読む」側の一人として、彼らに伝えたいと考えていた。「自分の言葉にできる喜び」から、「自分から言葉が離れる恐れ」を意識して、句に臨んだ。鶴岡夏鈴氏の「一切は……」の句は、第一九回俳句甲子園大会で個人賞を受賞した一句だが、大会の本番でこの句が披講される直前まで、彼女はこの句の読み方に悩んでいた。大会前夜になっても、悩みが全て解消されることはなかった。彼女も「読む」側として、この句に応えようと試み、苦しみを抱いていたのだろうか、今になって思う。自らの言葉へ、どこまで誠実に向き合えるのか。この問いは、私にとってこう投げ返された。「彼らの言葉へ、どこまで誠実に向き合えるのか。」

便箋に明易の香の水曜日

山田祥雲

白状すると、私は受賞句がどのように評価され、良い句となされたのかという事はわからない。私が彼らとの活動の中で求めていたのは、「彼らにとって最善の句」だった。彼らが句にしようとしていることは何なのか。「便箋に……」の句が誕生する前に、彼が書きあぐねた言葉から、その言葉ならざる気配を調べ、考え、あらゆる手段を摸索し、提示すること。そして、彼らが目指していた目的に合う句を、大会において使用できるように整えること。私がしたことはそれだけだった。それは、俳句で彼らが言おうとしていることに「答え」を出す事ではなく、それを表現する一つの方法を出すだけだ。私の手元に、彼らの句の最終的な答えは何一つとしてない。山田祥雲氏の右記の句が、大会中で「とても難解な句だ」と評されたとき、私はそれで

良いと思った。彼が感じた香りは私の感覚を超えていたが、だからこそ、私には彼らの句を読む楽しみがいつもあった。同時に、彼らが言わんとしていることが、私ではなく、私以外へ伝わるように書かれなければ、と恐れながら彼らと接していた。それでも、彼らが夏の全国大会で、たくさんの評価に翻弄されながらも、喜びや悩みを得た時は、彼らと共にそれを受け止め、同じ感情を持つような心がけた。結果は一人が個人賞を受賞、チームとして団体奨励賞を受賞した。

大会後、主な活動は句会へと移り、はじめて多くの季語に触れ、自由な作句期間を過ごしていたように思える。それだけではなく、全国大会で多くの句集やエッセイ集を持ち帰り、俳句の多様な読みぶりに、各々が心を揺さぶられていた。時には、句集での文言についての質問が私宛に来て、たじろぐほどだった。その結果は「第十九回神奈川大学全国高校生俳句大賞」や、「第二十四回都留市ふれあい全国俳句大会」で意外に早く訪れた。共に外を出歩きながら吟行をする事こそなかったが、それぞれが俳句からたくさんの出会いを受け、二〇一六年の末には、一人一人が俳句へ明確な目標を持つまでになっていた。その時、少しずつではあるが、「私にしか作れないこと」を考えながら、句を出すことが多くなってきたように思える。一人一人にこだわりが見え始め、俳句をすることから、俳句で何をするかという新たな目標へ、明確に変化を見せていた。好きな俳人や、好きな俳句をそれぞれで見つけ出していたのも、この頃だった。ある者は、句が示す景に実直に向き合い、ある者は、常に意外性や独創性を求めて句を作っていた。それは、この回想録を書いている今でも変わらないことだ。つまり、彼らは二〇一七年から、既に私の手のある程度離れて俳句を作り始めている。

佐理の草書のいろにかぎろへり

陽炎や漆の箸が黄身くづす

棚原きらら

彼らと俳句との信義の前では、句会や俳句甲子園なんぞ、さらには私なんぞも通過点に過ぎないだろう。しかし、第二〇回俳句甲子園大会沖縄地区大会において、一言言わせてほしい。その通過点で、俳句ではなく、彼らが不当に評価され、俳句への道へ傷がつけられた時、指導者の立場ではなく、詩を書くものとして、或いは俳句甲子園出場経験者として、私は今からこの句たちを通じて、彼らが成そうとしたことをもう一度考えておかねばならない。俳句甲子園はおおよそ「季語」を題として提示し、その題に基づいて句を提出するため、ほとんどの場合有季の句が提出されることとなる。また、題として提示された言葉を季語として運用することを常に求められるため、大抵の場合、「季ずれ／季重なり」を避けて季語は一つに絞られる事となる。「石鯨玉」の句には「日傘」という季語が同時に存在しているが、それによって「石鯨玉」が醸すきらめきや、のどかさが損なわれることはないだろう。あくまでも、「石鯨玉」がこの句を主題として支えていることがわかる。季語を運用するということはどういうことか。彼らはそのことを常に考えながら、句を作っていた。常に目の前の自然物に対して懐疑的でありながら、季語を味わう事をしていった。そして、「佐理の…」の句が示すように、その時点で彼らにとっての句材とは、季語にはじまる自然景物だけではなく、例えば「佐理」という人の持つ物語や、草書があらわす「字体」といった、幅広い射程の中で捉えられていた。それを「俳句らしさ」という言葉が暗に示すような、「有季定型」という一つの読みのスタイルで捉えることなど出来ることがあるか。そのような読むことを禁ずることを私はしたいわけではない。しかし、そのような「○○らしき」の下

で、作者の当事者性を句から奪い、審査員の中で個別的な当事者性を新たに創造し、句の評価へつなげた上で、それを「客観的で正当な句の評価」として大会側が認めるのなら、私は今一度その評価に対抗するように、この場で評を出さねばならない。「陽炎や…」の句を作った彼女の涙へ、誰かが「何故泣いているのか」と問うのなら、私は「涙が流れているだけだ」と答えたい。決して彼女たちを敗北の意味で泣かせてはなるまい。その涙で、彼ら彼女らの思い出を終えてはなるまい。

この第二〇回俳句甲子園大会沖縄地区大会の一件に、私達は抗議文を提出した。運営側からの返答も送られてきているが、具体的な言文を示すことは避ける。しかし、この抗議文は決して自らの句を誇大評価してほしいという名目の元に作られたものではない。彼らが予選において敗北したことは事実だし、その過程に対して不服を抱いたことも事実だ。しかし、「自らの句を見直すこと」と、「運営を批評すること」は全くの別問題だ。彼らが「〇〇らしさ」を求められたのなら、何故「審査員らしさ」は同時に求められることがないのか。彼らは勝敗が欲しいのではなく、言葉と誠実に向き合う場が欲しかった。その場が「選手」と「審査員」によって区分されることに、幾分の恐れと内省も抱けないのなら、俳句甲子園は言葉を用いる文化的な場所ではなく、極めて政治的な場所と言わざるを得ない。そのような場として機能し続けるのなら、私は今後この大会出身としての肩書も賞もいらさないし、あらゆる記帳から削除してもらいたい。彼らと共に誠実に言葉と向きあう中で、つと芽生えた感情だ。

陽炎の淵に無秩序なる献花

安里恒作

彼の句が何故受賞したのかを、私は常に考え続けたい。賞はそれ単体では何の意味ももたらさない。「賞」それ自体が再度考察され続けなければ、その作品は賞に負けてしまう。那覇会場で受賞したという事実が抱く「沖繩らしさ」に、常に懐疑的になりながらこの句を考え、思い出す事が、今私が出来る彼らへの精一杯の償いだ。第二〇回俳句甲子園大会後も、彼らの俳句活動はもちろん続いていく。つい先月に彼ら彼女らを含めて行った新春句会は、とても楽しいものだった。大会以降の彼らの活動は、「臯月」の中の作品や、受賞歴で読みだされる事だろう。二〇一六年四月〜二〇一八年晩春までの彼らとの活動を思い出し、ここに記す。

